

註記 千早 正朝師

遺族焼香

來會者一同禮拜

追悼文 男爵 濱尾 新氏

追悼文 男爵 九鬼 隆一氏

追悼文 門人總代 横山 大觀氏

以上

當日來會者は總て百九十二名、遺族としては、令夫人もと子、令嗣一雄、令弟由三郎等の諸氏、九鬼男爵の追悼文は黑板（勝美）博士代讀せられ、講師法隆寺貫主佐伯大僧正以下の四師は、態々奈良縣法隆寺より上京せられたるなり。

次で佐伯大僧正の表白文と大西大僧正の啓白文、浜尾、九鬼（代読）、横山の追悼文が掲載されており、式後、精養軒で晚饗会が開かれ、百余名が出席し、正木直彦の挨拶、三上参次、有賀長雄、三宅雄二郎（雪嶺）の追憶談、黒板勝美による記念事業計画の提案（万場一致可決）、岡倉由三郎の謝辞等があったと記されている。昭和六年に至り、本校校庭に平櫛田中原型の岡倉天心銅像が建てられた。

⑤ 依嘱製作中央停車場壁画

年報（36頁）に記載されているとおり、大正二年、本校は鉄道院東京改良事務所より中央停車場（大正三年十二月十八日開業式挙行。東京駅と命名される。）の壁画製作を依託された。「大正二年 職員ニ関スル書類 庶務掛」によると、同年三月、黒田清輝に「中央停車場本

屋中央広間壁画工事監督」を囑託したい旨、鉄道院より文部省に照会があり、次いで文部省より本校へ照会があつて、本校の依嘱製作事業の一環として行ふことになったことがわかる。完成は翌三年八月で、その翌月に発行された『美術新報』第十三卷第十一号に和田英作の「竣工したる中央停車場の壁画」と題する報告が載っている。それによると、黒田は「山の幸」「海の幸」というテーマで鉄道院側が用意した下図に対し、一応そのテーマに倣つて別の案を立て、大正二年秋に下図を描き（東京国立文化財研究所所蔵の写生帖にその画稿があり、『黒田清輝日記』第三卷。（昭和四十二年。中央公論美術出版）に図版が掲載されている）、それをもとに和田英作と西洋画科卒業生の田中良および五味清吉が手分けして材料を集め、大正三年正月に五分の一の下図を作り、同年三月頃からモデルを使って現画（油画）の製作に取り掛つた。七月末に「山の幸」を意味する「機関手」「農業」「鉱業および林業」「工業」「操車」と「海の幸」を意味する「舵手」「水産」「運輸および造船」「漁業」「水難救助」の油画十点が完成し中央ホールの奥の室に取り付けられという。同誌にはそのうち六点の図版が掲載されている。この壁画は戦災で焼失した。

⑥ 『法隆寺大鏡』

大正二年十一月から本校は『法隆寺大鏡』の刊行を始めた。美術の宝庫たる法隆寺の研究、記録のために率先して大図録を編集刊行することを決定した本校は、黒板勝美、三宅米吉、今泉雄作、中川忠順、溝口禎次郎らを顧問に迎え、白石村治を編集事務囑託とし

て、毎月一輯刊行、四か年で完結の予定で編集に着手。大正八年七月刊行の別集『金堂壁画』を以て全六十四冊の刊行を完結させている。完結の際、『東京美術学校校友会月報』第十八卷第三号に『読売新聞』所載の「流泉生」による懇切な批評記事が転載されたが、「流泉生」は、

『法隆寺大鏡』は東京美術學校文庫から、去る大正二年十一月より本年五月迄五年半の長日月に亘つて刊行大成せられた通篇六十四冊の一大出版である。其の机上積寸一尺に近き大篇は我が藝術出版界の驚異であるが更に夫れが名詮自稱法隆寺一寺の建築彫刻繪畫工藝其他一切の靈寶を寫す一大鏡であるのを見る時、吾人は今更の如く法隆寺其物の偉大と其の大觀を是の如く大規模に且つ徹底的に、殆ど遺憾無き研究資料として斯界に寄與した編者の勞を多とせざるを得ない。

と記した上で編者の苦心と細々とした配慮をたたえ、製版についても、

此書は四ツ切形原板大玻璃版を常型とし、往々同大の木版を以て色彩の複製を試みたものである。此等圖版の成績は獨逸其他外國出版の或る物に比してなほ著しい遜色を感じるが、我國に於ける現今製版術の技巧の最上の物である事は許すに足ると思ふ。

と評価している。また、特に『金堂壁画』については、従来撮影が

困難であつたところ、

然るに幸ひにも壁画保存法研究の爲、大正六年の冬より翌春に亘つて當局は壁画の極めて大規模なる撮影を實行する機會を生じた。壁面の凡てを一樣に、不十分なる太陽の光線から離れて、之に代る強度の電光を以て照す爲二千燭のニトロ電燈二個の自由なる裝置が行はれた。寫眞機を上下左右に自在に且正確に動かす特別の設備も全成せられた。金堂壁画の隅迄残る限無く、一樣の明光に照された事は、恐らく空前にして又絶後の機會であつたと思はれる。『法隆寺大鏡』の『金色壁画』寫眞の全部は當局の特許を得て此時に成つたものであると云ふ。

と、その意義を力説している。

正木直彦校長は奈良県中学校長時代に古社寺の宝物取調べに携わつてたびたび法隆寺に出入りし、佐伯定胤と親交があつた關係上、法隆寺の保護と研究促進に大いに尽力した。その一例が明治四十四年の本校における太子祭・展覧会であることはすでに述べたが、『法隆寺大鏡』の刊行も彼の熱意に負うところが大きい。彼は本書が予想外の収益を挙げたので全額法隆寺へ収め、大正十年の聖徳太子一千三百年御遠忌挙行の準備費にあてたと言っている(『回顧七十年』)。

本書の刊行は大変な難事業であつたが、特に中川忠順、白石村治の努力により、着々と刊行が進んだ。中川忠順(一八七三〜一九二八)は著名な東洋美術史学者であるから、ここにあらためて紹介する必

要はないが、白石村治（一八六四～一九二九）は一般には知られていないので略歴を記す。彼は、元治元年十二月二十二日上州安中に生まれ、同志社、明治学院に学び、小田原、長岡、福島、仙台、奈良等で伝道に従事したが、明治四十二年末にそれを打ち切って上京し、古美術品の鑑定や売買にあたった。正木直彦とは奈良滞在中に古美術研究を通じて知り合ったものと考えられる。昭和四年十一月二十八日死去。中軒はその号である。本学芸術資料館の台帳には明治四十三年から大正二年にかけて彼が十数回も古画購入の仲介をしたことが記録されている。

なお、『法隆寺大鏡』の成功により、本校は大正十年から昭和四年にかけて『南都十大寺大鏡』も刊行する。

⑦ 国民美術協会結成

大正二年一月二十五日、のちに東京美術学校改革運動の母体となる国民美術協会が発足した。この日に確定した同会定款（『美術新報』第十二巻第四号。大正二年二月）によると、同会は日本の美術の進歩発展を図り美術家を保護奨励することを目的とし、展覧会開催、資金援助等美術発展に必要な事業を行うというもので、絵画（日本画、西洋画）部、彫塑部、建築部、装飾美術部を設け、各部選出の評議員による評議会と、さらにその中から選出された理事五名による理事会を置き、理事の互選による会頭一名を置くこととした。結成の背景や経過については『美術新報』第十二巻第二号（大正元年十二月）に詳しく記されており、それによると大正元年一月十七日、文展第二部審査委員たちの懇親会（上野精養軒）の席上、松岡寿がこの会を

フランスのソシエテ・ナショナル・デ・ボザールのような恒久的な組織にしたい旨述べたところ、黒田清輝が直ちに賛成し、また、岩村透は「美術行政上の諮問機関」ともなるような一大機関の必要性について演説するなどして満場一致で会の設立が決まった。そして、森鷗外が座長に推され、種々協議の末、黒田清輝、松岡寿、岩村透、和田英作、森鷗外、石井柏亭、岡田三郎助、吉田ふじお、小山正太郎、中沢弘光、南薫造が規則起草委員に選出され、事務所は本郷区龍岡町の岩村透方に置かれた。こうした組織が生まれた背景については『美術新報』は文展開設以来、諸団体の多くが存在理由を失い、次いで白馬会の解散が洋画界に於ける党派的偏執の掃浄に役立ち、さらに黒田清輝の帝室技芸員拝命が洋画界全体の榮譽として受けとめられ、洋画界に親和が増したことが要因であるとしている。

大正二年一月二十五日に至り、精養軒で創立委員会が開かれ、国民美術協会という名称と上記の定款が定められた。次いで六月二十一日には同所で第一回総会開催。八十五名が出席し、まず次の役員が選出された。

評議員

日本画部 島田墨仙、中倉玉翠、荻生天泉、鐫木清方、長安雅山、結城素明、島内松南、島崎柳塙、平田松堂、山村耕花
西洋画部 藤島武二、和田英作、岡田三郎助、久米桂一郎、黒田清輝、岩村透、石井柏亭、中沢弘光、小山正太郎、長原孝太郎、松岡寿、森鷗外、山下新太郎、中川八郎、永地秀太
彫塑部 朝倉文夫、武石弘三郎、新海竹太郎、畑正吉、石川確